

〈道〉の思想

「中道」の根本にある〈道〉。原義「まっすぐな道路」から「宇宙の根本原理」「道德規範」に至る意味の広がり注目して、中国と日本における〈道〉の思想的展開をたどる。

I 〈中〉から〈道〉へ

・〈道〉の誕生と広がり

〈道〉には、日常的な「道路」から高次の抽象的理念までを覆う、広範な意味の広がりが存在する。→①

仏陀の悟りに由来する「中道」は、インドから中国・日本に伝わった。中国では、老荘や儒教に元からある〈道〉の思想が、仏教と結びついて、「中道」の立場を現実化する。

日本では、中世以後に〈道の文化〉が成立し、他にない独自の展開を生み出す。

・中国における〈道〉の思想

老荘——「宇宙の根本原理」→②

儒教——「道德的規範」→③

II 日本における〈道〉の文化

・〈かたち〉(形)と〈かた〉(型)の相互作用

手本となるモデル(かた)の習得をめざす個々の実践(かたち)。

・はてしない求道(修業)のプロセス

修業は、一定の型が習得されることで終わらず、さらなる高みをめざす新たな段階に移行する。〈かた〉から〈かたち〉へ、〈かたち〉から〈かた〉へ、この二つの方向がたえず媒介される。→④

・〈見えるもの〉と〈見えないもの〉

目標となる〈かた〉は、①〈見えるもの〉②〈見えないもの〉の両方を意味する。

①出発点・到達点となる〈かた〉は、理想的な〈かたち〉として〈見えるもの〉。

②修業を究極の高みへといざなうのは、到達不可能な〈見えないもの〉。

【資料】

① 〈道〉の意味

「〈道〉とは真直ぐな道路が原義であるが、…「道は須臾も離るべからず」（『中庸』）とされることから、道理を意味するようになり（「道は理なり」『莊子』）、さらに万物の根源を呼ぶ哲学的な概念となる（「万物並び作れども…各おの其の根に帰り…道は乃ち久し」『老子』16）。中国でこの〈道〉について論じている代表的な古典は、『老子』『莊子』『周易』（『易経』）のいわゆる「三玄」の書である」（『岩波 仏教辞典』第二版、2010年、748頁）。

② 万物の根源

① 「道は一を生ず。一は二を生じ、二は三を生じ、三は万物を生ず」（『老子』第42章、小川環樹訳注、中公文庫、1973年、86頁）。

② 「道の道とす可きは、常の道に非ず。名の名とす可きは、常の名に非ず」（『老子』第1章、蜂谷邦夫訳注、岩波文庫、2008年、12頁）。

③ 道の規範的性格

「天の命ずるをこれ性と謂う。性に率^{したが}うをこれ道と謂う。道を脩^{おさ}むるをこれ教^{おしえ}と謂う。道なる者は、須臾も離るべからざるなり。離るべきは道に非ざるなり」（天が、その命令として[人間や万物のそれぞれに]わりつけて与えたものが、それぞれの本性である。その本性あるがままに従っていく[とそこにできあがる]のが、[人として当然にふみ行なうべき]道である。その道を治めととのえ[てだれにも分かりやすく]したのが、[聖人の]教えである。道というものは、[いつでもどこにでもあるもので、]ほんのしばらくの間も人から離れることのないものである。離れられるようなものは、真の道ではない）（『中庸』第1章『大学・中庸』金谷治訳注、岩波文庫、2014年、141-143頁）

④ 修業の過程

「修業は、一定の〈かた〉への到達をステップとして、次のステージに入ってゆく。そこでは、確立された〈かた〉を自ら破棄する、いわゆる〈かたやぶり〉の手続きをつうじて、さらなる新しい〈かた〉をめざす修業の過程が待ち構える。この過程には、果てしがない。一つの〈かた〉から、次の〈かた〉へ、さらに新たな〈かた〉へ……。だが、目標地点に到達することは、けっしてない。なぜなら、修業がめざすものは、原理上、到達不可能な超越的理想であって、到達が不可能であることによって、武道——他の道でもまったく同じである——の修業が無限に続けられるからである」（拙稿「〈道のロゴス〉試論」『関西大学文学論集』第七十三巻第三号、48頁、2023年12月）。

【概要】

前回のテーマは、「〈中〉のロゴスへ」。今回のテーマは、「〈道〉の思想」——〈道〉は〈中〉と合わさって、「中道」を構成する。なぜ、〈道〉を問題にするのか。〈道〉の意味は、平易かつ奥深い。〈自分で考える〉哲学にとって、考える手がかりとなる最適の言葉であり、専門家の独占する哲学の知を、みんなに開くことができる。〈思考実験〉せよ。→①

私の立場(風土学)から言えば、a)従来の主流であった形而上学の支配から人々を解放し、b)日本から世界に発信できる哲学のベースとなりうるものが、〈道〉の思想。それにもとづく〈かたちの論理〉を仕上げたい。

I 〈中〉から〈道〉へ

・〈道〉の誕生と広がり

万国共通の〈道〉の意味が、〈中〉と結びついて、「中道」を生む。仏教(インド)から儒教・道教(中国)へと広がる「中道」の考え。日本では、それらの影響に立ちながらも、日本独自の〈道の文化〉が中世以後に発展する。

・中国における〈道〉の思想

老荘——「宇宙の根本原理」→②

儒教——「道徳的規範」→③

道は、そこからすべてが生まれる宇宙の原理=②、人がそれに従って生きなければならない道徳規範=③を意味し、道教・儒教にその考えが根づいている。

II 日本における〈道〉の文化

日本では、中国に見られる原理的思想の追究よりも、具体的な実践に重きを置く〈道の文化〉が展開した。〈道〉は、われわれの誰にとっても身近でありながら、奥深く尽きることのない実践の過程を意味する。

・〈かたち〉(形)と〈かた〉(型)の相互作用

・はてしない求道(修業)のプロセス →④

修業は、〈型〉の習得をステップとして、より高い境地をめざす新たな段階に移行する。〈かた〉から〈かたち〉へ、〈かたち〉から〈かた〉へ、この二つの方向がたえず媒介される。

・〈見えるもの〉と〈見えないもの〉

説明は省略。一つだけ挙げれば、〈かた〉の性格は、は、④〈見えるもの〉⑤〈見えないもの〉の両方に関係する点で、〈道〉に一致する。